

# スペインのバレンシア工科大学における 彫刻教育の特質について

難波 章人・福田 隆真

On the Particular Contents of a Course in Sculpture  
at Valencia University of Technology in Spain

NAMBA Akito and FUKUDA Takamasa  
(Received January 10, 2006)

キーワード：彫刻教育 基本素材 技術指導スタッフ

## はじめに

スペインは美術の歴史が深く、世紀の天才を生み出し続ける国として有名である。17世紀には宮廷画家のベラスケス、18世紀にはゴヤ、19世紀にはバルセロナのサグラダ・ファミリアを設計したアントニオ・ガウディー、20世紀にはシュールレアリスムのダリやミロ、様々な美術運動を起こしたピカソ、巨大な鉄彫刻をつくりだしたチリーダ、現在も精力的な活動を続け、レアリスム絵画で知られるアントニオ・ロペスなどがいる。<sup>1)</sup>

筆者難波は、2003年度にバレンシア工科大学・美術学部にて、2004年度にマドリッドのコンプルテンセ大学・美術学部にて彫刻を学んだ。バレンシア工科大学の美術学部はこの10年間で新しい美術棟が完備され、金属彫刻、木彫、陶芸のアトリエなどが新しくなった。それにともない、講義の数を増やし大きく変貌した。そうした新しい環境の中で彫刻を学んだことは、筆者にとって刺激的であり、体験したことのない新たな彫刻教育についても考えることが多くあった。

筆者のコンプルテンセ大学のカリキュラムを中心に考察した論文「スペインのコンプルテンセ大学における彫刻教育の特質について」(2005)に続き、この論文では、バレンシア工科大学で経験した彫刻教育を基に、どのような教授法が行われているのかを検証していく。その仕方として、バレンシア工科大学美術学部彫刻科で開講されている29の授業のカリキュラムの概要を紹介する。それを踏まえ、授業全体を4つの素材(石・木・鉄・粘土)と他素材に分け、具体的な教授内容について検証していく。素材別に検証することで、素材に即した具体的な教授方法を見出すことができると考える。

## I バレンシア工科大学 (Universidad Politecnica de Valencia) について

### 1 バレンシア工科大学の概要

Universidad Politecnica de Valencia (バレンシア工科大学) は、バレンシア中心街から少し離れた地中海のすぐ側に位置する。専門学校を前身とし、1971年に大学となった。美術学部、建築学部、情報工学部、農工学部等、15学部44学科から成り、3万6000人を超える学生を擁している。(2003年度)

ダイナミックで、かつバランスの取れた大学をスローガンに掲げ、発展し続けている大学である。



図1 バレンシア工科大学の上空写真

### 2 バレンシア工科大学美術学部の概要

美術学部はこの10年間で新しい棟を増設し、新たな教科と新しい学習プランをつくってきた。そして、まだまだ大きく変貌しようとしている学部である。また、この大学ではヨーロッパや南米の国々、中国、韓国、アフリカではナイジェリアなど、たくさんの留学生を受け入れている。それに加え、EU圏内では近年、他国との単位交換制度(エラスムス)が確立されていることにより、優秀な学生が多く集まり、とても刺激のある環境だと言える。

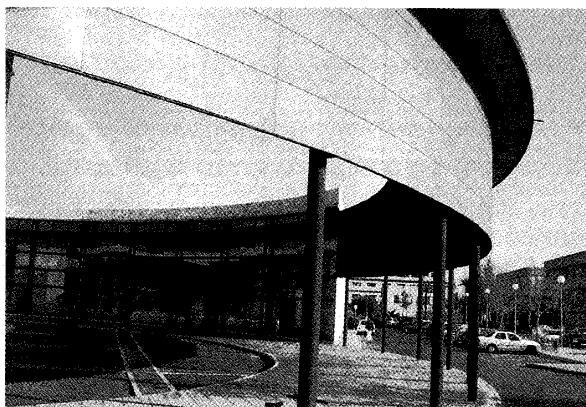


図2 美術学部の中庭と新棟

美術学部全体の教員数は190名以上にのぼり、その中で彫刻科の授業を担当する教員は45名である。学生は4回生になる時に、絵画や彫刻などの専攻別を決める。美術学部は5年制であり、スペインでは5年制が一般的である。美術科の学生の就職は基本的に造形美術関係、デザイン、映像、修復の4つからなっている。美術教員の免許を取得する学生もいる。(教員免許を取るためには美術学部に関わらず、大学卒業後に各自で一年間のコースを取ることとなる。)

## II 彫刻科の授業概要

バレンシア工科大学美術学部の彫刻科の授業名とそれぞれのカリキュラム<sup>2)</sup>の概要を紹介する。必修・選択に関わらず、すべての授業を載せるものとする。

### 1. サイクル1 (1、2年生用)

#### (1) 彫刻I (週6時間)

彫刻の概念と工程の基礎を学ぶ。創造過程への導入。20世紀の彫刻の基礎概念を理解する。塑像、構成、彫り、複製(コピー)の実践。

- (2) 彫刻Ⅱ (週6時間)  
対象物と空間の関係を彫刻制作の実践の中で考察し、問題解決していく。20世紀初めに発展したレディ・メイド (既製品) から詩情的オブジェまで、また、対象物のある彫刻から物質のない彫刻までの知識を深め、制作においても、継ぎ合わせたり、組み立てたりして応用する。建築と周囲の環境と共にある彫刻との関係を考察する。
- (3) ボリューム (週6時間)  
人体塑像のテクニックを通してボリュームの構築を学ぶ。粘土・石膏・コンクリートといった可塑性のある素材を使う。
- (4) 彫刻と視聴覚メディアⅠ (週6時間)  
視聴覚アートへの導入。「人体と映像」、「対象物と映像」、「空間と映像」という3つのテーマに対し、ビデオカメラで撮影する。視聴覚機器を使ったインスタレーションのコンセプトを考察する。
- (5) 哲学と20世紀の彫刻 (現代性を理解するための方法) (週3時間)  
様々な美学と哲学の間と現代美術の領域を交錯させることを主軸とする。「個人のアイデンティティー」、「自然と文化」、「公的領域と抵抗とマスメディアと宇宙」と名づけられたテーマに関して美学と哲学を学ぶ。
- (6) 伝統的技術を使った野外彫刻 (週6時間)  
近代的な新しい技術と伝統的な技術を比較する。また、彫刻のテクニックと形を比較することで、次の世代のために発達させる工夫を発見する。議論するための手段として、彫刻的伝達手段 (体・言葉・音・創造) を研究する。そして、伝達手段を調べるための芸術的実験に慣れるための教科である。彫刻的伝達手段としての光とイメージの研究、彫刻素材の音・響きについての実験。
- (7) 人体の彫刻的表現Ⅰ (週6時間)  
粘土での塑像とその型取りの技術の習得。石膏、蠟などを使う。彫刻的解剖学を学ぶ。3つの評価方法を知る。
- (8) 肖像彫刻Ⅰ (週6時間)  
粘土での塑像の中で、人間の真実を追究する表現力を目指す。人間の表情の彫刻的表現を重要視する。柔軟性のある素材における彫刻の創造のプロセスと彫刻を実現化するための工程を理解する。
- (9) 現代彫刻理論Ⅰ (週6時間)  
現代 (20世紀初頭) の荒々しい文化が生まれる中で、提示された概念全体を分析しようと試みる。イギリス、フランス、ドイツ、スペインなどの様々な国で起こった美術の様式からそれぞれの荒々しさについて考察する。
- (10) 彫刻の方法Ⅰ (週6時間)  
1997~1998年に始められた新しい教科であり、新しい試みである。陶器素材とその特性を、制作のなかで実験して知る。具体的なプロジェクトの中で、仕事 (想像と技術) の手段を学習する。
- (11) 彫刻の方法Ⅱ (週6時間)  
1997~1998年に始められた新しい学習プランである。鉄、鋼鉄、アルミニウムなどの産業素材を用いての実習である。また、木から派生した素材や表面加工された他の素材と金属との組み合わせを考察し、制作する。

(12) 彫りⅠ（週6時間）

彫りの手順と道具の働き・大切さを理解する。柔らかい石（アラバストロ）から硬い石（御影石）まで様々な硬さの石を理解し、制作する。また、様々な種類の木を彫る実践も行われる。ボリューム、空間、内と外の問題を学ぶ。

(13) 都市空間と社会統制（週6時間）

公的空間とプライベート空間について比較考察する。社会の都市空間は時代と共に変わることを知る。例として、社会全体が集合したメトロポリスについて議論する。そのなかで、社会のなかの街、自然の形態の意味、異文化などの点から考察する。

## 2. サイクル2（3、4、5年生用）

(14) プロジェクトⅠ（週6時間）

各個人が設定した芸術のプロジェクト計画を練るための科目である。想像のデザイン化、マケットの作成、情報処理の仕方などを身に付ける。また、展覧会の組み立てや設定、ギャラリー・美術館・企業を訪問をする。

(15) プロジェクトⅡ（週6時間）

公共空間・解説的プロジェクト・マルチメディア視聴覚機を使ったプロジェクトの3つのプロジェクトから選択する。どのようにプロジェクトを設計していくかという点を重視している。

(16) 彫刻と都市の状況（週6時間）

彫刻は都市社会のなかで、思考的で、コンセプティックに変革していることを知る。景観についての反省と分析を行う。彫刻と場所という観点から、政治の決定権、文化・商業との関係、都市と経済との関係を討議する。都会的なインパクトと彫刻が置かれる周囲の分析をした上で、実際の彫刻を制作する。彫刻が建築的に導入されることを知る。（交渉の仕方を知る）。鉄筋コンクリート、石膏じかづけ、金属の溶接などの技術を取り入れることを検討する。

(17) 彫刻と視聴覚機器Ⅱ（週6時間）

音響アートと彫刻、ビデオアートと彫刻のテーマに沿った講義と考察。野外彫刻における創造と音の新たな手段が影響を与えてきたことについて批評的に分析する。彫刻の創造における視聴覚伝達手段を介した表現技術の様々な可能性を適用し深める。彫刻と視聴覚映像の中での創造的な一体化に基づいて、個人のプロジェクトを考え、実現化する。

(18) 振舞う彫刻（パフォーマンス）（週6時間）

様々な種類のパフォーマンス芸術を知る。作家いく人かの一般的アイデアについて論評する。個人的なアクションとパフォーマンスの祭典のビデオプロジェクトの比較考察をする。パフォーマンスとは公的空間への介入であることを知る。

(19) 彫刻の方法Ⅲ（週6時間）

木の基本的な加工手順と特性を知る。また、木を素材としたときの特別な彫りの方法を知り、体験する。産業や手仕事によって出てきた素材を制作に取り入れる。個人の創造過程の中で、素材の使い方を構築し、どの技法により制作するのかが選択する力を身に付ける。

- (20) 彫刻の方法Ⅳ（週6時間）  
プラスチック素材を中心とした理論と制作を学ぶ。柔軟なプラスチック（詰まった形、膨らむ形）の感覚。硬いプラスチック（アクリル、ポリエスチレンなど）の認識。生活のなかにある様々な素材を知り、制作に取り入れる。（フォームラバー、ゴム、シリコン、スポンジ等）。
- (21) 彫りⅡ（週6時間）  
木彫として制限される彫り、独特の個性を研究する。制作のための基本的な面でのコンセプトを提起する。道具と特別な使用方法を学ぶ。本来の素材としての木と産業化された木について考察する。
- (22) 現代彫刻理論（週6時間）  
20世紀の美術における暴力表現の違いを学習する試みである。暴力表現に関して、ポップアート、ミニマル、アルテポーブラ、ボディアートなど様々な美的見解の形式を考慮に入れ考察する。フェミニズム、ジェンダーの問題など、現代的思想の議論。批評的感覚の発達を目的とする。
- (23) 鋳造（週6時間）  
金属の鋳造によって造られた歴史的に重要な彫刻の加工方法を知る。複雑な工程と創造的な過程を理解する。アイデアを彫刻に実現する様々な方策を思考する。鋳造の技術的実験を行う。
- (24) 都市空間と社会統制（週6時間）  
サイクルⅠ（13）の発展。
- (25) コンピューターによるデザイン（週6時間）  
立体的なモデリングの基本技術を学ぶ。そして、それらの立体を使い、コンピューターによるアニメーションに応用する。3D空間の研究と視覚化の習得。情報のつきとめ方と素材の獲得方法を知る。
- (26) 肖像彫刻Ⅱ（週6時間）  
様々な素材を用いて、また様々な技術を試みて、肖像彫刻を発展させる。肖像彫刻の概念分析と表現研究の中で、全体と形という観点に絞って問題提起をする。
- (27) 舞台美術（週6時間）  
20世紀の舞台の歴史を知る。演劇作品を分析し、舞台美術の深い知識を得る。劇場作品と劇場空間との関係。劇の時間の概念を考察する。インスタレーションとパフォーマンスの舞台化について考察する。
- (28) 人体の彫刻的表現Ⅱ（週6時間）  
人体の彫刻的表現Ⅰの発展。内容の明白な論理的理解を目指し、制作する。
- (29) 芸術的な新しい実験（週6時間）  
個性的な芸術的言語の研究をする。内部規律がある訓練の中で、学生の創造的学習を引き伸ばす。写真、ビデオ、コンピューターなどの新しいテクノロジーを使った実習。批評思考の発達を促す。

### Ⅲ 素材別に見たバレンシア工科大学の彫刻教育

バレンシア工科大学では、彫刻素材として石・木・鉄・粘土が特に多く扱われていた。よって、この大学での彫刻教育の中心となる基本素材を石・木・鉄・粘土の4つとして考え、それぞれ素材別に教授方法を検証していく。それぞれの素材に即した具体的な教授方法を考察していくことができると考える。また、これらの基本素材以外の他素材についても考察する。

#### 1. 石を素材とした彫刻教育について

学生が石彫を学び始める時に与えられる石はアラバストロというとても柔らかく半透明の石である。(石に光りが当たると、透き通って美しい。)初めは、20cm四方の小さな作品を制作する中で、鑿や槌の使い方を学習しながらも、彫る行為の楽しさを感じさせるよう自由な雰囲気の中で指導している。小さなアラバストロの制作は1ヶ月程度で終わり、次に大理石や砂岩を使って、彫りの習得・技術指導が行われる。大理石は他の石と比べて硬すぎず、粘りがあり、石彫の基本として多く使われている。また、砂岩は石の目がないので、とても彫りやすい。磨いても光沢は出ないが、むしろ、がさがさとした質感を大事にするよう教授されている。

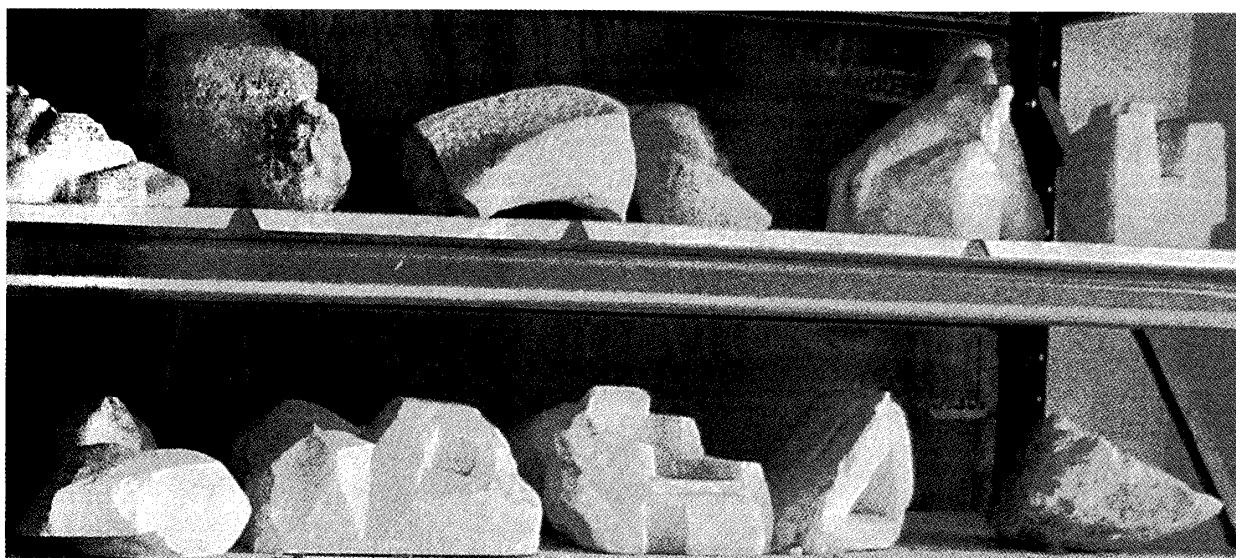


図3 学生の制作途中の作品群 (アラバストロ、大理石、砂岩)

2、3年生になると大理石を中心に50~60cm位の石を使う。学生にとっては大きな石を彫ることは抵抗がある。教授はまず、学生一人一人が切り出した石を前に、どのようなイメージが湧くのか、そしてその石を見て何を感じるかということをして学生に問いかける。こうして、学生たちの感情を表出させ、表現手段としての創造性に重点を置くことで、素材への恐怖感、不安感を克服させている。

また、一つの作品の中で、様々な種類の鑿を使えるように指導がなされている。図4は大理石でつくられた人の脳の模刻である。図案に脳の目方を書き込み、丸コンパスなど、測るための道具を用いて慎重に彫り進められていた。図5は蠅の眼球をモチーフにした作品である。少し、抽象化しながらも、モチーフの形をきちんと出している。このように、鑿をきちんと使うことで、個人が選んだモチーフ・対象物をきちんと形に置き換えられて

いる。他の素材にも言えることであるが、特に石彫はイメージだけで作品を完成させることは難しい。技術や道具の使い方がとても重要であり、職人的な技術が要求される世界であることを改めて認識させられる。

4回生以上になると大型の作品が目標になり、機械を使ってシャープな表現の修得が行われていた。図6はロケットのような形の抽象作品で、黒御影石を丹念に磨いて造られた。図7は音符が2つ寄り添った形をしている。グラインダーなどの機械を使って形を削り出し、下の方は鑿によって彫られている。上の磨かれたシャープな質感と下のごつごつとした温かみを感じられる質感をあわせ持つよう指導されている。



図4 学生作品 人間の脳の模刻



図5 学生作品・蠅の眼球周辺(大理石)

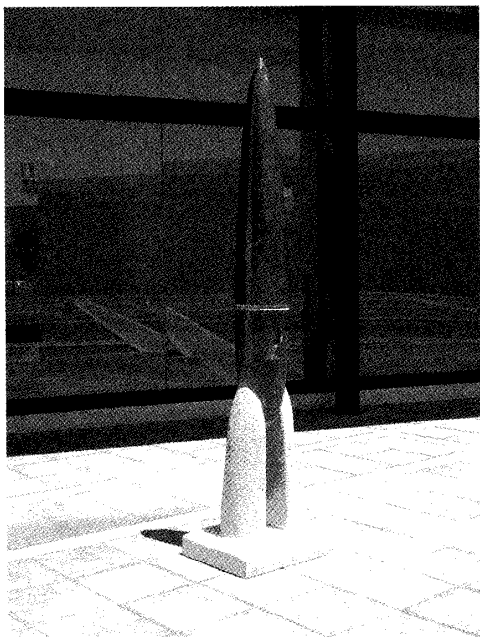


図6 学生作品(黒御影石)

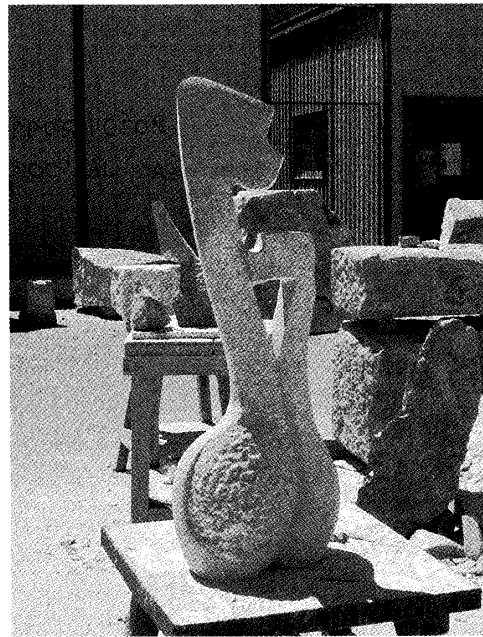


図7 学生作品

バレンシアは石材を手に入れやすい地域である。この大学では20ユーロ(約2800円)で1m×1m×1mほどの大きな石が手に入る。バレンシアから近郊の町アリカンテでは、世界的にも有名な石、ロハ・デ・アリカンテ(roja de Alicante)が産出される。この石は赤地に白い目が走り、磨くと深い赤がとても美しい。そうした地域の好条件を生かし、学生が様々な石材を選び、彫刻にすることができる。そして、その石に沿った技術研究と知識を身に付ける実践的な彫刻教育がなされていた。





図8 ロハ・デ・アリカンテを使用した学生作品



図9 石彫のための屋外のアトリエ

## 2. 木を素材とした彫刻教育について

バレンシアでは1年中を通して乾燥した時期が多く、降水量が少ないため、木材が不足していて高価である。よって、切り端として捨てられる木材を貼り合わせ、大きな一つの彫刻作品に仕上げる方法がとられている。

図10の学生作品の制作過程を基に、具体的な技術とこの教授方法の利点を考察していく。



図10 木片を貼り合わせた学生作品  
(制作途中)

<図10の学生作品の制作過程>

- ① 木材業者から余った木片を無料で譲ってもらう。(木片は様々な種類がある)。
- ② 木片の面を必要に応じて加工、表面処理する。
- ③ 木工ボンドにの粉や顔料を混ぜ、色付のボンドとして使用する。小さな木片を多数組み合わせるため、ボンドが表面に出てくるため、色付のボンドを彫刻の色彩として積極的に使っている。
- ④ 木片をボンドで貼り合わせ、大きな塊を作っていく。
- ⑤ 作品の下絵を参考にしておおまかな形を作り、乾燥後、のみや電動ノコ、グラインダーで削っていく。
- ⑥ 仕上げは様々なやすりを手でかける。

木片を張り合わせる方法を使用することで、どんな大きな作品でもつくるのが可能であることを強調して教授されている。そして、木材の入手方法を学生にしっかり提示してやることで、学生がおもいきって大きな作品をつくる環境をつくりだしている。また、多種類の木材を張り合わせるため、木そのものの色の違いが作品に反映されることに注意するよう、指導されている。このように、バレンシアでは木材が不足していて高価であるが、



こうした風土を逆手に生かした制作、彫刻技法が学生に推奨されている。

余った木材ではなく、板状の木材を買って彫刻にする制作も行われている。図11の学生作品では人体の有機的なフォルムと鉄を組み合わせている。図12の学生作品は2メートルを越す大きな顔面をつくっている。それを木型として使い、同じ顔面を鉄でつくろうとしている。このようなダイナミックで自由な発想の基に木の素材を扱い、制作することを重点に置いている。

木彫用の鑿や道具に関しては、スペイン以外（特にドイツ・イタリアや日本）の製品を使う割合が高い。日本製の自動かんな機の独自性や、日本製の彫刻刀の質のよさなども紹介されていた。このように、いろいろな国の道具を取り入れることで木彫の新たな制作方法を研究するように指導されている。

また、産業材としての木（合板やパルプ）を彫刻に取り入れる実験的制作を推奨しており、現代美術の作品に見られる木材の使われ方とコンセプトの考察についても教授されていた。（例としてイギリスの作家リチャード・ディーコンが紹介されている）。



図11 木と鉄を組み合わせた学生作品



図12 学生作品（制作途中）

### 3. 鉄を素材とした彫刻教育について

「彫刻の方法」の授業における課題を記述し、その制作過程とともに検証する。

課題1：厚さ3.2mmの鉄板を使い、50×50×50(cm)の立方体をつくる。

- ① 大きき180×90(cm)、厚さ3,2mmの鉄板を買う。
- ② プラズマ切断機(電気で切断する機械)を使い50×50×50(cm)の正方形を6つ切る。
- ③ 切断した鉄板のエッジをグラインダーで削る。次の作業の溶接をしやすくするためである。
- ④ 6つの鉄板を1枚ずつ電気溶接していく。この時、鉄板を直角に固定するために磁石付きのL字定規を使う。

⑤ 立方体をつくり、そのエッジをグラインダーできれいに削る。

検証：課題1は、学生全員に同じ大きさの立方体をつくらせることで鉄彫の基本的な技術を確実に修得させるように設定されている。学生にとって、鉄はどのように彫刻にしているのかという点において分かりづらく、とっつきにくい素材である。よって、はっきりと決められた課題の中で鉄彫の成形方法と概念を学ぶ必要がある。また、④の作業過程で立方体のエッジを削る理由はこの立方体が一つの塊として表現できることを学ぶためである。鉄彫がマッサを獲得するには鉄板を貼りあわす方法が基本的になること学生に実践させ、理解させる教授法と言える。

課題2：課題1で完成させた立方体を基にして、形体を付け加えたり、削ったりする方法で発展させる。

検証：図13は課題2でつくられた学生作品である。鉄板をきれいに曲げることのできるローラーを使って円柱をつくっている。その形態は完全に閉じずに、少し内の空間を見せている。ここでは、課題1で学んだ「一つの塊を表現する方法」を理解したうえで次の段階へと進んでいることが分かる。まず、他素材と同様、マッサを獲得する知識と能力を身に付けさせ、その後、アイデアと個性的表現が求められるよう指導されている。つまり、鉄の彫刻を学ぶ時、鉄板や鉄の棒をただ溶接していっただけでは彫刻の学習として発展していかないことが分かる。



図13 課題2の学生作品

課題3：課題1、2で得た技術を使い、新たな発想のもとに自由制作

学生に自由な発想のもと制作させるため、課題1と2では使用しなかった機材の推奨と改めて再度、機材講習を行っている。

図14は自己の受講作品である。鉄板を切断するときには鉄板が熱で曲がらないようにプラズマ切断機を使った。鉄板をローラーできれいに曲げ、溶接していき、2つの弧を背中合わせに配置構成した。図15の自己作品では、教授が鉄と他素材の組み合わせを推奨していたこともあって、実験的に鉄と木を組み合わせしてみた。他素材との組み合わせや比較をさせることで鉄彫刻の新たな可能性を探らせる効果がある。

鉄彫刻で、一つのマッサを表現するため、鉄板を貼り合わす方法を先ほど述べたが、もう一つの方法がある。それは鉄の塊、つまり、無垢の鉄を使う方法である。世界的にも有名なスペインの鉄彫の作家エドゥアルド・チリーダ（1924～2002）は無垢の鉄を使って彫刻を造りだす。図16の作品は鉄塊を熱し、少しずつ曲げながらつくられた。鉄板を張り合わせたものとは違う力強さとエネルギーに満ち溢れている。こうした技法を大学の中だけで、つくことは難しい。しかし、マケットサイズの小さな作品を制作、実験してみる価値はあり、この彫刻科でも紹介されている。

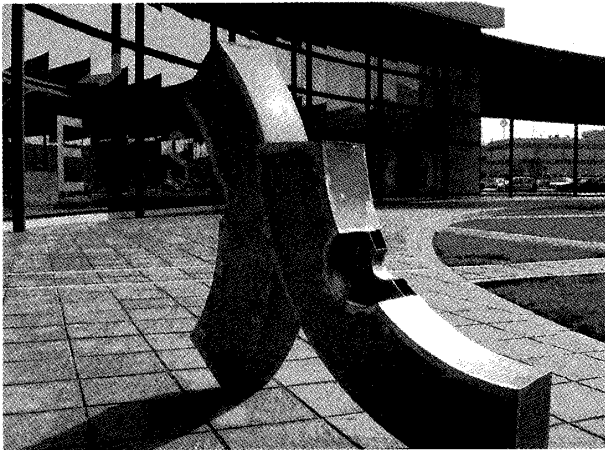


図14 自己作品（大学の学生寮買い上げ）



図15 鉄と木を組み合わせた自己作品



図16 チリーダの作品



図17 金属彫刻のためのアトリエ

#### 課題4：集中講義のグループ制作

集中講義では、学生全員で1つの作品をつくる課題がある。(図18) これほどの鉄の彫刻を個人で完成させるのは難しいものだが、教授とテクニコの指導のもとで作りだせている。各個人の表現ではないが、一つのプロジェクトを通して得られる技術工程の修得と理解に適応した課題である。

彫刻のアトリエには、テクニコ(tecnico)と呼ばれる技術のみを教えるスタッフが5～6人存在する。彼らは朝の8時から夜の9時まで2人以上常駐し、技術指導や機械・道具の修理を行っている。これは、技術に関する指導、体制は日本よりもはるかに進んでいる。



図18 グループ制作での学生作品

#### 4. 粘土を素材とした彫刻教育について

1回生の時に、粘土への導入として、そして彫刻の基礎として石膏像の模刻を初めに行う。模刻においても、個人の感情が感じられるような頭像を目指すように指導されている。

また、静物の塑像においては、対象物と空間の関係を制作の中で意識し、空間を重要視するように指導されている。

2、3回生になると、「人体の彫刻的表現Ⅰ」の授業で初めて人体の全身像をつくらせる。実際の制作実践のなかで、粘土での人体塑像をつくる技術を学び、人間をつくる意義について考察するよう指導されている。また、彫刻的解剖学の知識を与える時間をつくることで、人体の構造を学生にしっかり教えている。早い段階で、人体の骨組みとフォルムを理解することを重要視している。

粘土での仕事が終わると、石膏で型を取り、最終的な作品素材を学生に決めるよう指導されている。古色を帯びさせた石膏、人工石、ポリエステル、ブロンズなどを例に挙げ、実際の手順と技法を細かく解説する。こうした技法はまず、学生が理解したうえで実践していくことが効果的であると言える。

「肖像彫刻」の授業では、生のモデルを使い、粘土での塑像を通し、人間の真実を追究する表現力を目指すよう指導されている。そして、粘土での塑像に基づき、自然を解釈する試みが行われていた。像彫刻をつくる上で、プロポーションとシンメトリックについて注意するよう教授されている。また、モデルの仕草や表情の心のゆれを大事にするように指導されている。

もう一つの制作課題として、写真に基づいた肖像、歴史的人物の肖像、記念碑としての肖像について考察し、制作に取り組むものがあつた。ここでは、肖像彫刻の歴史的な作品や様々な知識を増やすことも大事にしていた。

粘土での塑像における作品評価の基準は、表現力の評価・造形的評価・美的評価の3つに分かれている。この評価基準は学生にカリキュラムの中で知らされている。よって、教員と学生が共通した基準を持ち、ディスカッションできる。また、学生も制作する上で何が大事なのか、どこに気をつけて制作すればよいのかが明瞭であり、理解しやすい利点がある。

## 5 様々な素材を通した彫刻教育について

4つの基本素材（石・木・鉄・粘土）以外にも様々な素材が彫刻教育に取り入れられている。例えば、人体塑像の学習の中では、石膏、コンクリートといった可塑性のある素材を使い、ポリウレタンの学習を行っている。

また、石膏じか付けの技法を通して、感情表現の露出について学び、即行性のある作品を体験する。そして、石膏と他素材の融合を検討することで、新たな発展を目指すよう指



図19 大学内の敷地に設置された塑像の学生作品（ブロンズ）

導されている。この他にも、プラスチック素材を中心とした制作学習の中で、柔軟なプラスチック（詰まった形、膨らむ形）の感覚と硬いプラスチック（アクリル、ポリエスチレンなど）を認識させている。そして、生活のなかにある様々な素材（フォームラバー、ゴム、シリコン、スポンジ等）を知り、どう彫刻化していくか研究するよう指導している。

新しいテクノロジーを使った実習も各授業で行われており、写真、ビデオ、コンピューターなどの機器を使い、彫刻とどう関わらせていくかを考察させている。また、舞台芸術における彫刻を考察するプロジェクトのなかで様々な素材を空間の中でどう生かすか研究している。

バレンシアでは陶芸に古い歴史と伝統がある。（生活に密着した陶器が多く、地中海を思わせる青色やレモン色の釉薬が特徴的である。）バレンシア工科大学でも「彫刻の方法Ⅰ」の授業で陶器素材の学習を行っている。

このように、他素材を用いた彫刻教育は分化していく現代美術に対応できるよう設定されている。様々な素材を使った実践制作を通し、概念的な彫刻に陥らず、常に刺激的で個性を発揮させるために効果的である。

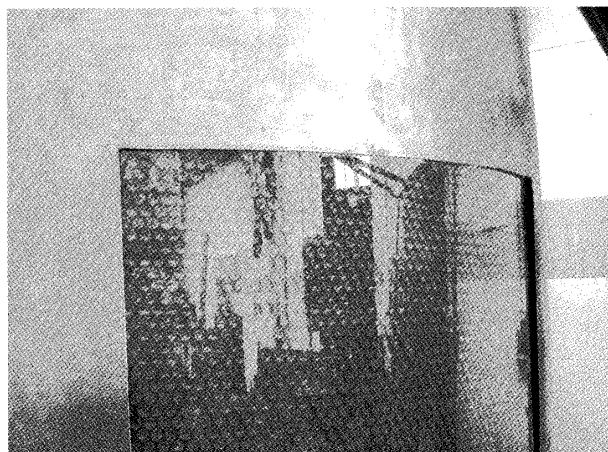


図20 ポリエスチレンを使った学生作品

#### Ⅳ バレンシア工科大学における彫刻教育の特質について

スペインのバレンシア工科大学の彫刻教育の特質は様々な面で見受けられ、大きく次の7つの項目に集約した。

- ① 彫刻科はここ10年の間に、テクノロジーと様々な学科を彫刻教育に取り入れることで大きく領域を拡大させてきた。「彫刻の方法」という新しい授業を打ち出し、様々な素材を彫刻にしていく手順や制作工程について教授している。これらでインсталレーションや舞台芸術など、現代美術にも対応できるよう設定されている。
- ② 彫刻素材として石・木・鉄・粘土が特に多く扱われていた。そして、これらの4つの基本素材の指導の徹底が確立されている。それに加え、様々な素材が彫刻教育に取り入れられている。アトリエに常駐し、毎日、技術的指導をしているテクニコ(技術スタッフ)の存在も大きい。
- ③ 石彫の教授方として、石を見て何を感じるのかを学生に問いかけ、学生の感情を表出させることで、石への恐怖感、不安感を克服するように指導されている。そして、表現手段としての創造性に重点を置いている。

- ④ バレンシアでは木材が不足していて高価であるため、小さな木材の断片を貼り合わせ、大きな彫刻作品に仕上げる制作方法が推奨されている。こうした風土を逆手に生かした制作、彫刻技法が学生に推奨されている。
- ⑤ 鉄彫の教授方としてキュービズム的彫刻の実践が多く見られる。キュービズムという遺産を大事にしながら、様々な素材を組み合わせることで、もう一段階、発展したかたちの新しい彫刻が生まれるように教授されている。キュービズム的彫刻を取り入れた教育が盛んな理由に、ピカソに始まり、鉄の彫刻家として有名なチリーダらの影響があろう。
- ⑥ 粘土での人体塑像においては、彫刻的解剖学の知識を与える時間をつくり、人体の構造を学生にしっかり教えている。塑像学習の初めの段階で人体のフォルムを理解することを重要視している。
- ⑦ 個人ではなく共同作業として、グループ制作が行われている。一つのプロジェクトを通して得られる技術工程の修得と理解に教育効果を上げている。

## 注

- 1) 難波章人・福田隆眞 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第20号 2005
- 2) バレンシア工科大学美術学部彫刻科のカリキュラム 2005年度

## 図版出典

図1 UNIVERSIDAD PORITECNICA DE VALENCIA  
(バレンシア工科大学要項)

## 参考文献

- ・バレンシア工科大学美術学部彫刻科のカリキュラム 2005年度
- ・UNIVERSIDAD PORITECNICA DE VALENCIA (バレンシア工科大学要項)
- ・BARRY MIDGLEY “GUIA COMPLETA DE ESCULTURA, MODELADO Y CERAMICA, TECNICAS Y MATERIALES” (彫刻の完全ガイド, 塑像と陶芸, 技術と素材) 1999

## 付記

本稿を作成するにあたり、難波と福田が企画し、難波が執筆し福田がまとめた。